

心の輪を広げる体験作文 中学生部門 最優秀賞

「心の壁」

相模原市立小山中学校

一年

原子

倭佳

はらこ

わか

私が足の不自由な女の子と出会ったきっかけは、その子が私の家の近くに引っ越してきたことです。

その時私は、「車椅子があ、つらいだろうな」と思いました。なぜなら自分の思うように動けなかったり、みんなと同じように遊べなかったり、不自由なことが多いと思ったからです。また、その子の両親も大変だろうと思いました。車椅子ということは、一人でお風呂にもトイレにも行けず、きっとその子に付きつきりなのだろうと想像したからです。

ある日、私は学校帰りに、近所の子に「家の前で一緒に遊ぼう」と声をかけられました。行ってみるとその中に、この間見かけた車椅子の子がいました。そして、その子と一緒に遊ぶことになりました。私は最初、戸惑いました。「どうやって遊べばいいのだろう」と。しかし、他の子たちの様子を見ると、車椅子の子と他の子たちは、楽しそうに鬼ごっこをして遊んでいました。それまでの私は、障がいのある子とどのように接して良いかわかりませんでした。そのような子に実際に接したこともないし、もしそのような機会があったとしても、うまく言葉をかけられなかったと思います。なぜなら、気にさわることを言って傷つけそうだし、遊ぶ時もどんな風に遊べばいいか考えなくてはならないからです。

しかし、他の子たちには、そんな様子はありませんでした。みんな

なキャツキャツと騒いで、車椅子の子は障がいがあるようには感じませんでした。

私は、その様子を見て、仲良くしている子たちの事を、「私には到底できない。えらいな。」と、思いました。

それから、よく声をかけられるようになり、一緒に鬼ごっこをする機会が増えてきました。その中で、段々と考えるようになりました。車椅子の子が他の子達と同じように、手加減なしで鬼ごっこをするにはどうしたら良いのだろうか。

他の子に比べると、車椅子の子はどうしても逃げるのが遅くなってしまう。すると車椅子の子だけが、ずっと鬼だったり、すぐに捕まってしまうのです。

どうすれば車椅子でも他の子たちと同じ速さで捕まえたりつかまったりを繰り返して遊べるのか、私は一生懸命考えました。他の子の速さに、車椅子の子が合わせるのは難しいです。しかし、みんなが車椅子の子にあわせることはできません。だから、みんなはスキップで追いかけて逃げたりしてはどうか、と思いつきました。

みんなにその方法でやってもらうと、誰もが思いつき逃げたり追いかけてたりを楽しむことができました。幼稚園生から小学6年生までの6人が、対等に遊びました。車椅子の子は、必死に追いかけて捕まえることができました。その時、女の子は「やった！」と思わず声が出て、ガッツポーズをしました。

鬼ごっこが終わると、みんなへとへとで、最後にオニになった子は、悔しくて泣きました。本当にみんなが、思いつき力を出し切って走ったんだと思いました。

車椅子の子と遊んでいるうちに、出会った最初の時とは私の考え

は変わっていました。

「車椅子とういことは不自由ばかりではない。少し工夫するだけで、他の子と同じように楽しく遊ぶことができる。」そう思うようになりしました。そして車椅子＝不自由だ、と勝手に決めつけていた自分に気が付きました。

また、障がいのある子とない子が、同じように過ごすためには、お互いの努力が必要だということにも気が付きました。障がいのある子は、自分を閉じ込めたり不安に思わない、障害のない子は、想像したり、考えを工夫することが大切だと思います。

私は、障がいがある事を理由に、拒絶されたり、自分を出せない世の中ではなく、障がいがある人となない人の間に、壁を作らない世の中になればいいと思います。そのために私は、障害のあるなしを意識せず、互いに声を掛け合える仲間になりたいです。